

中国人留学生の留学の成果と満足度の関連要因

—困難への対処方略を中心に—

張 慧穎 (お茶の水女子大学)

1. 研究の背景と目的

国際化に伴い、留学生のモビリティはさらに高まり、留学の成果やその関連要因に関心が集まっている。これまでの留学生に関する研究は、留学生の困難や異文化適応などを中心に積み重ねが行われてきた。異文化環境に入る留学生には、困難に対処し、解決する能力が必要になる。そのため、留学生の問題解決能力など、留学の成果のポジティブな側面に関する研究が注目されている。本研究は、中国人留学生の困難への対処方略と留学の成果の内容、およびそれらと留学の満足度との関連を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本調査は日本の大学、大学院に在籍する中国人留学生 105 名を対象に、質問紙調査を 2021 年 4 月～6 月に実施した。質問紙調査用紙には調査の目的および意義、匿名性、研究への参加の自由と不参加でも不利益が生じない旨を明記し、調査の同意を得られた対象者にオンラインにより配布し、回収した。本調査は、お茶の水女子大学人文社会科学研究の倫理審査委員会の審査承認を得た上で実施した。

質問紙の内容は基本的属性、対処方略、留学の成果、留学の満足度からなる。対処方略に関しては、尾関 (1993) による大学生のコーピング尺度 14 項目を使用した。留学の成果に関して、新見 (2017)、荒井・広沢 (2003) などを参考にし、計 30 項目作成した。収集されたデータは統計的手法で分析を行った。

3. 結果

対処方略について、プロマックス回転による因子分析を行い、3 因子が抽出された。第 I 因子は、「自分で自分を励ます」、「今の経験はためになると思うことにする」などの項目から構成され、問題を解決するための積極的な対処になり、「問題解決努力」と命名した。第 II 因子は、「先のことをあまり考えないようにする」、「何らかの対応ができるようになるのを待つ」、「なるようになれと思う」の 3 項目から成り、問題に向き合わずに情動的な回避という対処となり、「問題回避 (情動)」と名付けた。第 III 因子は、「時の過ぎるのにまかせろ」、「こんな事もあると思ってあきらめる」の 2 項目から構成され、何も行動せずにいる対処であるため、「問題回避 (行動)」と命名した。信頼性係数 (α) は、第 I 因子 $\alpha=.689$ 、第 II 因子 $\alpha=.664$ 、第 III 因子 $\alpha=.549$ であり、一定の内的整合性が認められた。

留学の成果については、以上と同様にプロマックス回転による因子分析を行い、5 因子が抽出された。第 I 因子は、「問題解決能力が高まった」、「自己効力感が高まった」などの 6 項目から成り、さまざまな能力が高まることを示す内容となるため、「能力の向上」と名付けた。第 II 因子は、「教員の勉強における指導がよくできた」、「教員との間には信頼関係が成り立った」などの 4 項目から構成され、教員との関係や信頼性が表す内容であるため、「教員との関係の構築」と命名した。第 III 因子は、「環境・貧困問題等の地球的課題に対する意識が高まった」、「政治・社会問題への関心が高まった」などの 4 項目から構成され、グローバル問題への関心や意識が向上した内容であるため、「グローバル意識の高まり」と命名した。第 IV 因子は、「社交性が高まった」、「大学での人間関係が充実ができた」などの 3 項目から成り、人と接することによる充実感が得られたため、「人間関係の充実」と名付

けた。第V因子は、「日本人との交流ができた」、「様々な国の人との交流ができた」の2項目から構成され、母国以外の国の人との交流ができたという内容であるため、「外国人との交流の達成」と命名した。信頼性係数 (α) は、第I因子 $\alpha=.852$ 、第II因子 $\alpha=.872$ 、第III因子 $\alpha=.822$ 、第IV因子 $\alpha=.822$ 、第V因子 $\alpha=.639$ と、一定の内的整合性が確認された。

対処方略と留学の成果、留学の満足度との関連を把握するために、パス解析による因果モデルの分析を行った。その結果、得られたパス・ダイアグラムを図1に示した。データとモデルの適合度については $GFI=.979$, $AGFI=.927$, $RMSEA=.032$ という値であった。標準偏回帰係数を見ると、対処方略の「問題解決努力」から留学の成果の「能力の向上」と「グローバル意識の高まり」への影響について、それぞれ有意な正の影響を与えていることが明らかになった (それぞれ $\beta=.56$, $p<.001$; $\beta=.38$, $p<.001$)。次に、「能力の向上」が「教員との関係の構築」と「人間関係の充実」にそれぞれ有意な正の影響を与えていることが確認された (それぞれ $\beta=.47$, $p<.001$; $\beta=.55$, $p<.001$)。さらに、「教員との関係の構築」と「人間関係の充実」がそれぞれ「留学の満足度」に有意な正の影響を与えていることが明らかになった (それぞれ $\beta=.25$, $p<.01$; $\beta=.40$, $p<.001$)。

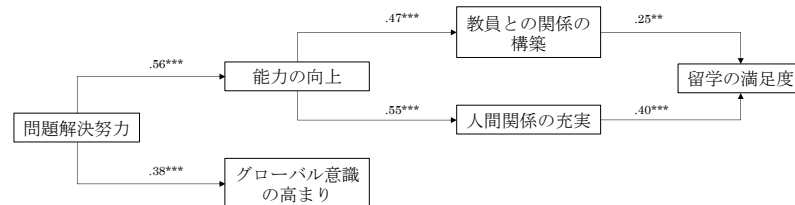


図1 対処方略と留学の成果および満足度に関するパス解析結果

注 数値は標準化されたパス係数を表している
 *** $p<.001$, ** $p<.01$ (誤差変数の表記は省略)

4. まとめと考察

本研究では、中国人留学生の「問題解決努力」の対処方略が「能力の向上」及び「グローバル意識の高まり」に影響を与えることが明らかになった。また、「能力の向上」が「教員との関係の構築」と「人間関係の充実」に影響を及ぼしており、さらに、「教員との関係の構築」と「人間関係の充実」が「留学の満足度」に影響を与えることが明らかにされた。

中国人留学生は、困難に直面する際に、積極的に解決努力をするほど、さまざまな能力が上がり、グローバル意識が高まる傾向にあると解釈できる。問題解決努力をする中国人留学生は、困難を解決しようと努力する過程でさまざまな能力を身につけることができ、グローバル意識も高くなると推測できる。また、中国人留学生は、自分の能力が上がると認識しているほど、教員との間に信頼関係が築けており、人間関係が充実していると考えることが確認できた。それは、さまざまな能力が上がることにより、人との関係に対処する能力も高くなり、教員との間に信頼関係の構築ができており、人間関係が充実になると推察される。さらに、教員との関係の構築や人間関係の充実が留学の満足度につながるということが明らかになった。

参考文献

- 荒井真太郎・広沢俊宗 (2003) 「大学に対する満足感の規定因に関する研究—日本人学生と留学生の比較—」『関西国際大学研究紀要』4, 155-167.
- 尾関友佳子 (1993) 「大学生用ストレス自己評価尺度の改訂—トランスアクション的な分析に向けて—」『久留米大学大学院比較文化研究科年報』1, 95-114.
- 新見有紀子 (2017) 「日本人大学院留学生の授業関連活動への参加と能力・意識の高まり—自己評価に基づく質問票調査の結果より—」『異文化間教育』46, 125-139.